

2023（令和5）年度 東北アジア研究センター共同研究報告書

提出 2024(令和6)年4月21日

代表者 岡 洋樹

(本報告書はセンター内外への公開を原則とします)

研究題目	和文) 清代モンゴル社会における自生的秩序生成に関する研究 英文) Study on the Autochthonous Order Restructuring of Mongolian Indigenous Society in the Qing Times			
研究期間	2023（令和5）年度～2024（令和6）年度（2年間）			
研究領域	(E) 紛争と共生をめぐる歴史と政治			
研究組織	氏名	所属・職名	専門分野	役割
	岡洋樹	東北大学・東北アジア研究センター・教授	東洋史学	研究の総括、人の移動と秩序形成
	中村篤志	山形大学・人文社会科学部・教授	東洋史学	清朝中央の動向と地域秩序
	オチル・オユンジャルガル	モンゴル国立大学・准教授	モンゴル史	主従関係の秩序
	佐藤憲行	復旦大学・准教授	モンゴル史	都市定住地における秩序の形成
	フフムチル	内蒙古大学・准教授	モンゴル史	モンゴル農耕社会における資源分配の秩序
	ブレンソド	内蒙古師範大学・准教授	モンゴル史	財産とその秩序
	掘内香里	日本学術振興会・特別研究員(PD)	モンゴル史	身分および性差の規範とセーフティネット
研究経費	学内資金	センター長裁量経費 [金額] 250,000		
	外部資金(科研・民間等)	基盤研究(C)「清代外藩モンゴルにおける軍事動員態勢の研究」(課題番号:23K00862)	[小計]	600,000
	合計金額	850,000円		
研究の目的と本年度の成果の概要(600-800字の間で専門家以外にも理解できるようにまとめてください。)	本共同研究では、日・蒙・中の国際的共同研究により、モンゴル社会における清代的秩序の具体的な様態や、その変容、脆弱性、矛盾を多面的に解明する。その際、モンゴル人だけでなく、他のエスニシティーをも視野に入れ、清朝の統治が生み出した社会的変容の相をもモンゴル社会の自生的/自制的秩序構築の一環と位置づけることで、現場の全体性を確保した清代モンゴル社会の内在的解明を目指す。本年度は、参加者で研究内容の共有と成果公開の方法について議論を行い、2024年度中に成果論文集の刊行を行うこととした。岡は、乾隆期清朝によるモンゴル人越境移動者に対する人身把握の実情を、理藩院の満文題本を史料として研究した。オユンジャルガルはモンゴル西部のザハチン部、トルグート部について、行政統治と社会関係の両面から検討を行っている。ブレンソドは、ハラチン旗を対象として財産相続について検討しているが、これに関わって婚姻関係と土地利用に			

	<p>ついて論文を刊行した。フムチルは清代モンゴル社会の所有・相続概念であるウムチ・ホビについて検討を行っている。本研究ではこれを土地について研究。佐藤憲行はフレイの商業地区の秩序について研究を進め、中村篤志は乾隆年間に地方の一章京が起こした訴訟事件の顛末を通じて、旗内の社会秩序を検討している。組織外参加者アルタンザヤは、清代の外モンゴル・ハルハに現れたシャビ領（仏教教団の属民）の統治構造上の意義について研究を進めている。堀内香里はウランバートルで史料調査を行った。現在各分担者は成果の論文化を進めており、今年度中の刊行を目指している。</p>		
本年度の活動における東北アジア地域研究としての意義についてアピール	<p>研究一年目であり、具体的な成果の発信は来年度になる。東北アジア地域は、17世紀以来特にその内陸部において、清朝が巨大な帝国統治を行い、北方のロシアと並び立った。多様な民族を支配下に置いた清において顕著に見られた現象が人の越境移動であり、それによって形成された多文化的な帝国秩序である。本研究は、現在の東北アジアの文化的多様性を生み出した清の帝國的秩序の様態を具体的にみることにより、それが生み出した現在の東北アジアの文化的多様性の歴史的文脈と特質の理解に貢献する。</p>		
研究集会・企画	研究会・国内会議・講演会など： 回	国際会議： 2回	
	研究組織内参加者（都合）： 7人	研究組織外参加者（都合）： 1人	
研究成果	学会発表（ ）本	論文数（1 ）本	図書（ ）冊
専門分野での意義	[専門分野名] 東洋史学	[内容] 近年のモンゴル史研究において、清代公文書史料を用いたモンゴルの社会構造・行政統治・社会関係に関する研究が急速に進展している。本研究はこのような流れの中で、この分野の一線の研究者を集めて、最新の研究成果を集約することにより、今後の研究に新たな展望を切り開こうとするものである。	
学際性の有無	[無]	参加した専門分野数：[] 分野名称[]	
文理連携性の有無	[無]	特筆事項：	
社会還元性の有無	[有]	[内容] 研究成果を論文集として刊行することにより、学界のみならず、一般の読者に対して最新の成果を還元し、モンゴルの歴史に対する理解の増進を図る。	
国際連携	連携機関数： 5	連携機関名： モンゴル国立大学、モンゴル国立教育大学、内蒙古大学、内蒙古師範大学、復旦大学	
国内連携	連携機関数： 3	連携機関名： 東北大学、山形大学・日本学術振興会	
学内連携	連携機関数：	連携機関名：	
教育上の効果	参加学生・ポスドクの数：	参加学生・ポスドクの所属：	
第三者による評価・受賞・報道など			
研究会計画全体のなかでの当該年度成果の位置づけと今後の課題	<p>本年度は研究初年度であることから、次年度の成果発表を目指して、11月に研究分担者の研究内容について報告を行い、共有することにより、清代モンゴルにおける秩序問題の中でいかなる部分をターゲットとして研究し、他のメンバーの研究内容とどのような関係に立つのかを確認した。また2024年度の東北アジア研究センターの成果刊行補助を申請、採択を見た。</p>		
最終年度	該当 [無]		

本共同研究に関わる業績（発表予定含む）

本年度は、各研究分担者は研究の実施・論文作成に専念し、期間中に開催したミーティングで研究の進行状況を共有した。

[学会発表]

[雑誌論文]

フムテル「北元から清代に至るモンゴル貴族のウムチ・ホビ分配の変遷」『元史及辺疆与民族研究集刊』第四十六輯、2024年（印刷中）（漢文）

ブレンソド「清中期ハラチン地方の蒙漢通婚関係」『蒙古研究』2023年第4期（蒙文）

ブレンソド、サチュラナ「清末期ハラチン左旗の差役地」『内蒙古民族大学学报』2023年第2期（蒙文）

オユンジャルガル「ザハチン総管に関する新しい情報」『ザハチンの歴史と宗教、文化遺産』ウラーンバートル、2023年

オユンジャルガル「満洲時代のトルグート、ホシヨードの姻戚関係」『トルグートの歴史・宗教・文化遺産』ウラーンバートル、2023年

[その他]

岡洋樹「清朝の外藩モンゴル統治における移動者に対する人身把握について」本共同研究ミーティング、2023年11月25日、オンライン

フムテル「清代モンゴル農耕地帯の土地制度試論」（同上）

ブレンソド「清代中後旗ハラチン・モンゴル人の財産とその相続秩序」（同上）

オユンジャルガル「モンゴル人の伝統的社会組織：主従関係」（同上）

佐藤憲行「ダムノールチン地区にみる都市空間秩序の形成」（同上）

中村篤志「アシグ章京の訴訟とモンゴル社会」（同上）

*ファイル名は KyodoRpt_年度_代表者ローマ字とする。二つある場合、代表者名の後に 1, 2 と記入する（例 KyodoRpt_2013_oka1）。